慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「ジャンセニスム」を語ることは可能か
Sub Title	Peut-on parler du ?
Author	御園, 敬介(Misono, Keisuke)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.63 (2016. 10) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20161031-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「ジャンセニスム」を語ることは可能か

御　園　敬　介

はじめに

「ジャンセニスム」は、危機に瀕した言葉である。今日では、それを一つの幻影、「想像上の異端」と見なす立場が支配的であり、そこから、用語そのものを放棄しようとする傾向が生まれている。本来、こうした主張は、アルノーやニコルら、論争の渦中にいた特定の論者が表明した意見に過ぎなかった[1)]。したがって、それを真に受けることなく、たとえば当時のある文筆家に倣って、ジャンセニスムは架空の存在であるどころか現実の脅威――「国家内の政治集団 corps d'État dans l'État」――であったと、全く逆の主張をすることもできる[2)]。しかし、20 世紀半ば以降の事情は、その限りではない。論争の文脈を離れた学術研究の枠内で、ジャンセニスムへの逆風が吹き始め、その名称の適切性に疑問が投げかけられるからである。近年、この傾向はますます強まっており、「ジャンセニスム」はいまや、鍵括弧なしでは使うことのできない警戒すべき言葉の一つになっている。

---

* 本稿は、文芸事象の歴史研究会主催シンポジウム「『パンセ』と書物の〈深淵＝無限反復〉――パスカルと〈ジャンセニスム〉：歴史の記述と認識」（2015 年 12 月、慶應義塾大学）での発表内容に加筆修正を施したものである。

1）P. Nicole, *Les hérésies imaginaires, ou les lettres sur l'hérésie imaginaire*, Liège, A. Beyers, 1667.

2）L. de Marandé, *Inconvénients d'État procédant du jansénisme*, Paris, S. et G. Cramoisy, 1654, p. 109.

こうした批判的な見方は、ジャンセニスムを語るうえで避けて通れない障壁である。どのような仕方で語るにせよ、我々は、それの何が問題なのかを問う前に、それが問題になり得るのかを問い直すよう、常に迫られている。言うまでもなく、ジャンセニスムは、近世フランスの重要な宗教事象の一つとして、様々に論じられてきた。しかし、議論の前提を揺るがしかねないこの原理的な問いは、先行研究を通して消化されてきたとは言い難く、未解決のまま今も残されている。このような状況を踏まえ、本稿では、ジャンセニスムを語ることはまだ可能なのか、もしそうだとしたらそれはどのようにか、という二点を、先立つ主要な論者の方法論を参照しながら再考したい。

1.「ジャンセニスム」への逆風

一見すると奇妙なことだが、ジャンセニスムへの逆風は、ジャンセニスムの専門家によって生み出された。文学史家ジャン・オルシバルが「ジャンセニスムとは何か」と題して 1951 年に行った講演でのことである。二年後に発表されたその原稿は、ジャンセニスムの問題を考えるうえで、今でも第一に参照せねばならない重要文献であり続けている[3)]。まず、その議論の骨子を確認しておこう。

オルシバルが試みたのは、ジャンセニスムの定義を批判的に検証する作業であった。そのために彼は、ジャンセニスムを特徴づけるとされる様々な要素を順次検討していく。神学的立場、政治的選択、道徳的態度、霊性、教会観、心理的傾向など、論じられるテーマは多岐にわたるが、議論の方向性は明快である。従来与えられてきた定義はどれも、狭すぎるか広すぎるかのどちらかで、不十分だというのである。たとえば、ジャンセニウスの遺著『アウグスティヌス』からジャンセニスムを定義する場合、サン＝シランにせよ、アルノーにせよ、ケネルにせよ、歴史上「ジャンセニスト」と呼ばれた人たちが実際にはジャンセニウスの神学から離れていった事実が抜け落ちてしま

3）J. Orcibal, « Qu'est-ce que le jansénisme ? », in *Études d'histoire et de littérature religieuses. XVI^e^-XVIII^e^ siècles*, réunies par J. Le Brun et J. Lesaulnier, Paris, Klincksieck, 1997 [1953], p. 281–295.

うため、その定義は、より広範な現実に対応しないものと見なされる。霊性や心理的傾向からジャンセニスムを定義する場合には、キリスト中心主義であれ、純粋さや完全さへの志向であれ、その特徴とされるものは、どれも当時のカトリック改革に広く共有されていた、という指摘がなされる。つまり、それらの定義は、ジャンセニスムを超える要素を含んでしまう点で、やはり適切ではないというのである。

このような分析を積み重ねた結果、オルシバルは、ジャンセニスムという語に込められた意味の多様性を深刻に受け止め、次のような結論を導いた。

> 哲学的な言葉で言えば、ジャンセニスムには機能的な統一しかない。それは、実体的な統一を想定した言語活動が作り出した幻想である。あたかもそこに一つの本質があり、その多様な側面が時代に応じて現れただけであるかのように。まったく別の言い方をすれば、ジャンセニスムはジャノのナイフである。柄をとりかえ、刃をとりかえても、それは常に同じナイフなのだから[4)]。

明晰にして大胆な結論である。では、多様な現実と自由に結びつけられた「ジャンセニスム」を前に、我々はどうすればよいのか。オルシバルは二つの提案をして論を閉じる。一つは、より正確な言葉がない場合を除いて、ジャンセニスムという言葉は使わず、ポール＝ロワイヤルやその友について語ること。もう一つは、時代に応じて形を変えていった様々な思想や傾向を混同しないことである。

この講演は、その後の研究史に大きな影響を及ぼした。1961 年には、当該分野のもう一人の権威ルイ・コニェが、クセジュ文庫の一冊『ジャンセニスム』の結論で次のように述べている。

> このような主題には短すぎる本書の記述を終えるにあたって、確認して

4）*Ibid*., p. 294.

おくべきことがある。ジャンセニスムという語に明確な知的内容を与えるのは、ほぼ不可能だということである。厳格で懐古的なジャンセニウスのアウグスティヌス主義、アウグスティヌス的というよりはベリュル的なサン＝シランの実践的な霊性、アルノーやニコルが表明したトマス主義の傾向を帯びた見解、そこにガリカニスムやリシェリスムの色彩を強く与えたケネルの見解、そして上訴派の政治的で党派的な執拗さ。これらの間には、歴史的な連続性によってしか覆い隠すことのできない大きな隔たりがある。それゆえ、ジャンセニスムを完全に分析可能な閉じた思想体系として定義しようとしても意味がないように思われる[5)]。

思想史家ジャン＝ロベール・アルモガットはさらに進んで、1974年、『霊性辞典』の項目に次のように記す。

本質的に、ジャンセニスムは歴史家の手になるものである。彼らこそが、そこから統一を引き出したり、そこに統一を与えたりしようと試みた。「ジャンセニスム」の項目の存在を正当化するためには、この点に関する研究が不可欠である[6)]。

パスカル研究者のフィリップ・セリエもまた、「ジャンセニスムとは何か」と題して2000年に発表した論文のなかで、正統なアウグスティヌス主義がジャンセニスムという名のもとに非難された「スケープゴート」の側面を指摘しつつ、中立性を欠いたこの言葉の使用を止めて「ポール＝ロワイヤルのグループ」を取り上げることを提案している[7)]。オルシバル以来の伝統は、

5）L. Cognet, *Le jansénisme*, Paris, PUF, coll. « Que sais-je ? », 7e éd., 1995 [1961], p. 123.（朝倉剛・倉田清訳『ジャンセニスム』、白水社、1966年、137頁）

6）J.-R. Armogathe, « Jansénisme », in *Dictionnaire de Spiritualité*, t. VIII, Paris, Beauchesne, 1974, col. 103.

7）Ph. Sellier, « Qu'est-ce que le jansénisme (1640–1713) ? », in *Port-Royal et la littérature*, 2e éd., t. II, Paris, H. Champion, 2012 [2000], p. 61, 93. セリエは、

確固たる仕方で維持されているのである。

2.「反ジャンセニスム」へ

こうした研究動向を、どのように受け取るべきか。まず、提示されている論証が強固なものであることは、認めなければならない。一種の差別用語として生まれた「ジャンセニスム」が、引き受け手を欠いた言葉として、様々な意味を獲得したのは事実だからである。オルシバルが述べたように、一義的な定義を求めることは困難であると言わざるを得ず、その限りにおいて、アウグスティヌス主義やカトリック改革といった、より適切な用語で現実を言い表そうとするとすることは、当然の要請であるように思われる。歴史家イヴ・クルメナケールが指摘するように[8]、オルシバルの問題提起が、その後のフランスにおけるジャンセニスム研究の進展を阻む「ブレーキ」となったのは、致し方ない事態であった。

もちろん、別の見方も存在する。たとえば、18 世紀のジャンセニスム史を専門とするモニック・コトレは、一世代上の歴史家ルネ・タヴノーの立場を受けて、単数形のジャンセニスムを語ることはできないが、複数形のジャンセニスムを語ることはできる、しかも、それらは全体として一つのまとまりを形成している、と考える[9]。これは歴史家のあいだである程度共有され

2012 年にも、ジャンセニスム論争を「偏狭な問題 question étriquée」と評している。Cf. Ph. Sellier, « Préface » au livre d'A. Cousson, *L'Écriture de soi. Lettres et récits autobiographiques des religieuses de Port-Royal*, Paris, H. Champion, p. 13.

8）Y. Krumenacker, « La question janséniste », in G. Deregnaucourt, Y. Krumenacker, Ph. Martin et F. Meyer dir., *Dorsale catholique, Jansénisme, Dévotions : XVI^e^-XVIII^e^ siècles. Mythe, réalité, actualité historiographique*, Paris, Riveneuve éditions, 2014, p. 32.

9）M. Cottret, « La querelle janséniste », in J.-M. Mayeur, Ch. et L. Pietri, A. Vauchez et M. Venard dir., *Histoire du christianisme des origines à nos jours*, t. IX : *L'âge de raison (1620/30–1750)*, Paris, Desclée, 1997, p. 351 ; id., « Les jansénismes de René Taveneaux », in *Dorsale catholique*, *op. cit.*, p. 33–46. タヴノーはジャンセニスムを「心性の問題 fait de mentalité」と見なすに留めた

た見解のように見えるが、しかし、オルシバルの問いに正面から答えるものではない。なぜなら問題は、それら複数の現象をそもそも「ジャンセニスム」と呼ぶ必要があるのかという、より根本的な部分に関わっていたからである。

では、もはや「ジャンセニスム」に居場所はないのだろうか。必ずしもそうではない。ここで注目すべきは、ベルギーの教会史家リュシアン・セイッサンスの方法論である[10]。セイッサンスにとっても、ジャンセニスムの存在は自明ではない。しかし、その議論の進め方は、オルシバルのそれとは大きく異なっており、ジャンセニスムはその敵対者による産物と捉えられている。同じくベルギーの教会史家ロジェ・オベールが指摘するように[11]、それは、「反ジャンセニスムがいわばジャンセニスムよりも前に存在した」とする立場である。そこから、セイッサンスはジャンセニスムと反ジャンセニスムの不可分性と相関性を強調しつつも、アルノーらが当初から唱えていた主張に合流し、おもにジャンセニスム抑圧の動向に焦点をあてた研究に邁進することになった。歴史家ジャン＝パスカル・ゲは、最近の注目すべき著作で、フランスの研究史において、ジャンセニスムは事件になっても反ジャンセニスムはそう見なされない傾向にあったと指摘しているが[12]、セイッサンスは、こうした不均衡を是正する仕事を進めたのである。

こうした試みは、オルシバルの結論を超えて先に進むためのヒントを与え

が、オルシバルはその不十分さを批判している。Cf. J. Orcibal, compte rendu du *Jansénisme en Lorraine. 1640–1789* de R. Taveneaux, in *Revue de l'histoire des religions*, CLIX/2, 1961, p. 232–233.

10）L. Ceyssens, « Le jansénisme. Considérations historiques préliminaires à sa notion », in *Analecta Gregoriana*, LXXI, 1952, p. 3–32 ; id., « Pour une histoire plus poussée et plus explicite de l'antijansénisme », in *Actes du colloque sur le jansénisme organisé par l'Academia beligica, Rome, 2 et 3 novembre 1973*, Louvain, Publications universitaires de Louvain, 1977, p. 1–19.

11）*Actes du colloque sur le jansénisme*, *op. cit.*, discussion, p. 20.

12）J.-P. Gay, *Morales en conflit. Théologie et polémique au Grand Siècle (1640–1700)*, Paris, Les Éditions du Cerf, 2011, p. 39.

てくれる。なぜなら、それは、実体のない事象の追及をやめるかわりに、「想像上の異端」がどのように作られたのかを探求する方向へと我々を導くからである。つまり、迫害の歴史を抑圧の歴史として読み直すことで、「ジャンセニスム」を所与のものとして捉える静的な理解から、それを形成されたものとして捉える動的な理解へと移行することができるということである。オルシバルの議論に欠けていたように見えるこの「生成」の問題は、定義の困難を認めつつ「ジャンセニスム」を考察対象に据えるための重要な視角を提供するものと言えよう。

その場合、ジャンセニスムは、ジャンセニストと呼ばれた人たちが実際に抱いていた見解ではなく、彼らに押し付けられた一つの異端を意味する。その核心には、ジャンセニウスの著書から導き出された五つの神学命題とその解釈があり、問題の発端が恩寵と自由の関係をめぐる教義論争にあることを確かに示している。しかし、生成の観点に立つ限り、その異端が本当にジャンセニスムなのかは問題にならない。そのようなものとしてジャンセニスムが作られていったプロセスが問題なのである。

こうして、反ジャンセニスムの運動の側面が重要な意味を帯びる。それは誰によって、どのように進められたのか。様々に変化した局面の多様性を思えば、この問いに答えることは容易ではない。しかし、大局的に見れば、それは、ローマ教皇庁、フランス王権、聖職職者会議、およびその周辺に集った文筆家たちから成る緩やかな連合体による異端ジャンセニスムの認定作業と言えるかも知れない。

そのことを示す例として、ここで、1650 年代半ばの様子をかいつまんで見てみよう[13)]。この時期、フランスでは、その後の事件の展開に大きな影響を与えることになる公式決定が矢継ぎ早に公表される。その最初の一つは、教皇インノケンティウス 10 世の大勅書「クム・オカジオーネ」（1653）であった。フランス側から裁断を委ねられた五つの神学命題を断罪したこの宣

13）この点については、拙論「フランスにおける反ジャンセニスム政策の形成―1654 年 9 月 29 日の教皇インノケンティウス 10 世の小勅書 *Ex litteris* をめぐって―」（『一橋社会科学』第 3 号、2007 年）を参照。

言において、命題とジャンセニウスの関係――やがて「事実問題」と呼ばれることになる――は必ずしも明瞭ではなかったが、翌年マザランが招集した高位聖職者会議は、五命題が「ジャンセニウスのものとして」断罪されたことを決議する。会議は、教皇の意図をいわば勝手に解釈してしまったわけだが、ローマに送られた使者の巧みな交渉もあって、インノケンティウス 10 世は、小勅書「エクス・リテリス」(1654) において、フランス側の態度に満足の意を表明した。じつは、この小勅書でも、五命題と『アウグスティヌス』との関係は付随的にしか述べられていないのだが、フランスの反ジャンセニストは、それを徹底的に利用し、抑圧政策を具体化させていった。最も注目すべき措置は、有名な「信仰宣誓書」への署名強制であるが、同じ時期に、その根拠となる公文書を整理した一種の史料集が編まれていたことも、見過ごすことはできない。反ジャンセニストは、教皇や国王、聖職者会議が発する関連文書を集成し、一冊の書物として公表する時期が来たと考えたのである[14)]。これを改訂するかたちで翌年印刷に付されたのが、当該問題の重要資料たる『フランス聖職者会議の審議報告[15)]』初版である。これらの編集作業は、フランスの聖職者たちが、ローマから届くラテン語の文書の一言一句にまで気をつかい、入念な翻訳を準備していたことを理解させてくれる。やがて、新教皇アレクサンデル 7 世は、大勅書「アド・サクラム」(1656) を発布し、反ジャンセニスムの気運にさらなる保証を与えるとともに、1660 年代における国王主導の抑圧政策に道を開くことになる。

ここで重要なことは、こうした権力の発動とその連携を通して、ジャンセニスムに一つの異端としての輪郭が与えられていったという事実である。五命題とジャンセニウスを結びつけ、ローマの権威に基づいてそれを異端と宣告し、フランス全土の聖職者に同意の意思表示を迫る一連の措置は、ジャン

14) *Constitution de notre Saint-Père le pape Innocent x par laquelle sont déclarées et définies cinq propositions en matière de foi*, Paris, A. Vitré, 1655.

15) *Relation des délibérations du clergé de France, sur la constitution et sur le bref de notre Saint-Père le pape Innocent x, par laquelle sont déclarées et définies cinq propositions en matière de foi*, Paris, A. Vitré, 1656.

セニスムの主張や担い手を浮かび上がらせる手段としての意味合いを帯びていた。文筆家たちがそれを後押ししたことは言うまでもない。『ジャンセニスムの秘密』、『ジャンセニスムの問題点』、『ジャンセニスムの誕生』、『ジャンセニスムの発展』、『ジャンセニスムの歴史』といった論争書が次々に現れたのもこの時期であり、それは間接的な仕方で、ジャンセニスムの形成に寄与するものであった[16]。

3.「ジャンセニスム」へ

しかし、強引とも言える政策そのものが物語るように、ジャンセニスムを異端と認定する試みは、大きな困難を伴った。歴史家アルフォンス・デュプロンによれば、近代に現れた異端の特徴は、信仰箇条の確立から教団の形成へと至る主体的な変容に求められるが、ジャンセニスムの嫌疑をかけられた者たちは、ローマ・カトリック教会を離れないと誓うことで、この主体性を最初から放棄していた。こうした「内部の異端 hérésie interne[17]」は、正統な教理を奉じる集団と同化しているため、明確な指標によってその存在を認定することが容易ではない。だからこそ、反ジャンセニスムは、隠れた異端

16）Cf. [É.-A. Dechamps], *Le secret du jansénisme*, Paris, S. et G. Cramoisy, 1651 (2e éd., 1651 ; 3e éd., 1653) ; L. de Marandé, *Inconvénients du jansénisme*, Paris, S. et G. Cramoisy, 1653 ; [F. Pinthereau], *La naissance du jansénisme*, Louvain, J. Gvius, 1654 ; [id.], *Le progrès du jansénisme*, Avignon, P. Thomas, 1655 ; M. du Bourg, *Histoire du jansénisme, contenant sa conception, sa naissance, son accroissement et son agonie*, Bordeaux, J. Mongiron-Millanges, 1658.

17）A. Dupront, « Réflexions sur l'hérésie moderne », in J. Le Goff éd., *Hérésies et sociétés dans l'Europe pré-industrielle. 11e–18e siècles*, Paris-La Haye, Mouton, 1968, p. 295. このように主体性を欠いた異端は、「質料的異端 hérésie matérielle」と区別されるものとして近世ヨーロッパに現れた「形相的異端 hérésie formelle」の様相に重なるものであり、「異端」の観念の変容という問題系に即して、より入念に検討する必要がある。Cf. J. Le Brun, « La notion d'hérésie à la fin du XVIIe siècle : la controverse Leibniz-Bossuet », in *La jouissance et le trouble. Recherches sur la littérature chrétienne de l'âge classique*, Genève, Droz, 2004 [1975], p. 137–160.

を炙り出し、自らの教会の外部にそれをジャンセニスムとして位置づけるべく手を尽くしたのであったが、「アウグスティヌスの弟子」を自称した当事者たちは、可能な限り教会の決定に寄り添う態度を取り続けることで、効果的に抵抗運動を展開することができた。

この点は、ジャンセニスムの歴史を考えるうえで、非常に重要である。なぜなら、彼らの抵抗が功を奏したからこそ、論争は長期化し、通常の異端の形成史とは異なる問題を抱えることになったからである。抑圧の歴史はそれだけでは成立し得ない。見過ごされがちなことだが、少なくとも「教会の講和」以前の論争において、論点の変化をもたらし、その展開を導いたのは、常に、ジャンセニストと呼ばれた少数派の側なのである。事実問題と権利問題を区分する戦術を編み出したのも、神的信と人間的信の区分を提示したのも、また、パリ大司教ペレフィクスによる妥協案を撥ね付けたのも、アルノーやニコルをはじめとしたポール＝ロワイヤルの神学者であった。これは、先に見た反ジャンセニスムの動向と矛盾する事実ではない。彼らの理論武装が強力であったからこそ、教会と国家は強引な政策に訴えざるを得なかったのである。その意味で、ジャンセニスムを、陰謀や空想の産物と見なすことは難しい。

そうであれば、我々は、セイッサンスの立場に留まっていることはできない。ジャンセニスムの理解のためには、反ジャンセニストに視点を移したあと、再びジャンセニストに目を向けなければならないのである。では、そこからどのような論点が生まれ、それがジャンセニスムの「生成」にどのように関わるのだろうか。

まず、問題の枠組みを確認しておこう。それは、教義よりも規律に関わっている。もちろん、当初の議論は、教義の解釈をめぐる争いであった。しかし、五命題を異端とした 1653 年の大勅書を受諾する段階になると、論点は変化する。命題が正統な教義に適っているかどうかは、もはや問題ではなく、それらをジャンセニウスの書物と結びつけた教会の判断の有効性が争点になるからである。ジャンセニウス擁護派は、この点で否定的な見解をとった。そこから、事実問題における教会の不可謬性や、信仰問題と不可分の「教義

的事実」、さらにはそれに向けるべき「信」のあり方など、様々な論点が生まれてくるのだが、それらは全て、教会と信徒との関係、すなわち教会内の規律をめぐる議論として現れている。信仰宣誓書の署名問題についても同様である。署名という行為の背後には、教会の決定が信徒をどこまで拘束できるのか、また信徒はそれをどのように受け入れるべきなのか、という問いが控えていたのだから。塩川徹也が指摘するように、論争は、「恩寵をめぐる神学問題」ではなく、「教会論ないし教会組織論」に属する問題を提起しているのである[18]。

このような射程を有する論争は、それ自体が、歴史的意義を探求すべき重要なテーマを構成する。激しい議論の応酬は、図らずも、新しい考え方を生み出す土壌になったのである。いまだ総合的な分析はなされていないが、事実に関する教会の不可謬性とその背後にある教導権の性質をめぐる問題にしても、信の理論とそこから生まれる内心の自由をめぐる問題にしても、「ジャンセニスト」が導いた論争には、近代ヨーロッパにおける集団と個の問題を考えるうえで見過ごし得ない論点が含まれているように思われる[19]。

しかし、いま注目したいのは、論争内容の思想史的な独自性ではなく、ジャンセニウス擁護派による抵抗運動と「ジャンセニスム」との逆説的な関係である。政策への抗弁を通して、彼らはジャンセニスムが架空の異端であると言い続けたのだったが、皮肉なことに、その抗弁は、ジャンセニスムの輪郭を一層際立たせる結果をもたらした。それはもちろん、論争を有利に進めた彼らが、ジャンセニスムに実体を与えようとする強引な政策の呼び水になっていたからであるが、それだけではない。彼らは、その筆の力を十全に

18）塩川徹也「ラシーヌとポール・ロワヤル」、小田桐光孝編『ラシーヌ劇の神話力』、Sophia University Press、2001 年、14 頁。

19）これらの問題については、当面、以下を参照。B. Neveu, *L'erreur et son juge. Remarques sur les censures doctrinales à l'époque moderne*, Naples, Bibliopolis, 1993, p. 505 *sq*. ; J.-F. Chiron, *L'infaillibilité et son objet. L'autorité du magistère infaillible de l'Église s'étend-elle aux vérités non révélées ?*, Paris, Les Éditions du Cerf, 1999, p. 41 *sq*. ; T. Shiokawa, *Entre foi et raison : l'autorité. Études pascaliennes*, Paris, H. Champion, 2012, p. 175 *sq*.

発揮しながら、異議申し立てをする「セクト」としてのイメージを自ら増幅させていたようにも見える。ジャンセニストは、理論的な次元で勝利することで、逆に抵抗勢力としての存在感を強め、意図せずして、ジャンセニスムの形成に一役買うことになったのである。この問題において彼らが果たした役割は、通常考えられている以上に大きい。抑圧政策の推進とそれを支えた攻撃的な文書の相次ぐ出版は、対象の側に内在する何らかの現実的な要因を考慮しなければ、説明がつかないのである。

では、その要因とは、どのようなものであったのか。これについては、いくつかの説明が可能である。たとえば、近年ジャンセニスムについて重要な論考を発表している歴史家ジャン＝ルイ・カンタンにならって、世俗社会からの隠遁を体現したいわゆる「隠者たち」の行動そのものが、迫害の引き金になっていたと考えることもできるし、教会組織よりもアウグスティヌスという教父に真理の基準を見出すその考え方に問題があったのだと言うこともできる[20]。これらは有力な見解だが、しかしそこでは、抑圧政策に対してジャンセニウス擁護派が実際にとった態度があまり考慮されていないように思われる。そこで、以下、彼らの行動の基本方針となった「恭しい沈黙 silence respectueux」の論理とその射程を駆け足で考察して、本稿を締めくくりたい。

4.「恭しい沈黙」について

「恭しい沈黙」は、ジャンセニスム論争に頻出するキーワードの一つだが、その表現と内容を掘り下げた分析は、まだなされていない。さしあたり、基礎的な情報を伝えている 18 世紀の辞書の記述が、一つの出発点になるだろう。1752 年刊行の『トレヴーの辞書』の『補遺』に現れた respectueux の項目である。以下にその全文を引用する。

20）J.-L. Quantin, « A godly Fronde ? Jansenism and the mid-seventeenth-century crisis of the French monarchy », in *French History*, XXV/4, 2011, p. 489–491 ; id., « Ces autres qui nous font ce que nous sommes : les jansénistes face à leurs adversaires », in *Revue de l'histoire des religions*, CCXII/4, 1995, p. 408 *sq*.

> インノケティウス 10 世が断罪した五命題をジャンセニウスが教えたかどうか、そして、それらの命題が彼の『アウグスティヌス』の中にあるかどうか、という問題について自分の考えを説明する義務は一切ないと主張した幾人かの博士たちの見解を、恭しい沈黙と呼ぶようになった。恭しい沈黙の問題は大変な物議を醸し、クレメンス 9 世はあの〔事実と権利の〕区分を容認したが、クレメンス 11 世は、1705 年 7 月 15 日の大勅書により、恭しい沈黙では〔先立つ教皇たちの〕大勅書に対する服従の義務を果たすことにはならない、と宣言した[21)]。

新たな用法の追加を旨とするこの記述は、確かに註釈を必要とするものではあるが、全体として一つの重要な事実を伝えているように思われる。すなわち、「恭しい沈黙」が、少なくとも当時は、ジャンセニスム論争に固有の用語として、普通名詞というよりはむしろ固有名詞の機能を帯びていたということである。それは、神学や哲学の伝統を背景にもつ概念ではなく、この論争を通して生まれてきた新しい振る舞いを指す言葉なのである。

この新しさの意味については、さらなる探求が必要である。ここでは、ジャンセニスムの形成という問題との関連から、先の引用文に若干の解説を加えるに留めたい。

文面にある通り、「恭しい沈黙」とは、ジャンセニウスの事実問題について意見表明を差し控えようとする態度を意味する。この態度をとったジャンセニウス擁護派は、事実の判定においては教皇も不可謬ではないとする立場から、五命題とジャンセニウスを結びつける決定には誤りがあったと判断したが、他方で、それを表だって言い立てることは、組織の上長者への敬意を欠く振る舞いになると考え、この点について沈黙を守る方針を明確にしたのであった。

『トレヴーの辞書』によれば、この「沈黙」に対して、二人の教皇が相反する評価を下したとされる。確かに、クレメンス 9 世は 1669 年の「教会の

21）*Supplément au dictionnaire universel français et latin*, Paris, Compagnie des libraires associés, 1752, *s. v.* « respectueux ».

講和」によってそれを受け入れ、クレメンス11世は1705年の大勅書「ウィネアム・ドミニ」によってそれを断罪しているから、この記述に間違いはない。しかし、ここで注意せねばならないのは、「教会の講和」がもたらした約30年の休戦期間を経て、「恭しい沈黙」への見方が変化したわけではないということである。「沈黙」を擁護する立場からフェヌロンと論争したサン＝ポンの司教ペルサン・ド・モンガイヤールは、18世紀になって「恭しい沈黙」から服従の意味合いが取り去られ、抵抗のニュアンスが付け加えられたと嘆いているが[22]、これは論争における一つの見解に過ぎない。実際には、肯定と否定の見方は、最初から最後まで併存していた。『トレヴー』の文章が伝える二人の教皇の判断は、「恭しい沈黙」を服従と見なす立場と、抵抗と見なす立場の、双方の主張を言い換えたものなのである。

管見の限り、「恭しい沈黙」の戦略を最初にはっきりと打ち出したのは、アントワーヌ・アルノーである。1655年7月10日付の『第二の手紙』において、彼は当時のポール＝ロワイヤルの立場を次のように表現している。

> 事実問題において、良心と目の証言に反する行動はしないとするに留め、それについてあらゆる異議申し立ては差し控え、恭しい沈黙を守る決意をしている。こうした個別の事実においては、公会議に対してさえ、それ以上、服従の義務はない[23]。

このように明言する者を、どうして異端と認定することができようか。これがアルノーの主張であり、また、数か月前から周囲の神学者も共有していた見解であった。しかし、この方針は、すぐに大きな障害にぶつかることにな

22）[P.-J.-F. de Percin de Montgaillard], *Nouvelle lettre de Monseigneur l'évêque de Saint-Pons, qui réfute celles de Monseigneur l'archevêque de Cambray, touchant l'infaillibilité du pape*, s. l., 1707, p. 85–88.

23）A. Arnauld, *Seconde lettre ... à un duc et pair de France*, Paris, s. n., 1655, in *Œuvres*, éd. G. Du Pac de Bellegarde, J. Hautefage et N. de Larrière, t. XIX, Paris-Lausanne, S. d'Arnay, 1778, p. 466.

る。翌年、信仰宣誓書が作成されると、事実問題についても、同意の意思表示が求められるようになるからである。ジャンセニウス擁護派は、沈黙の方針を貫徹するためには、署名の強制が不当であると声を上げねばならない状況に追い込まれた。ここから、信と不可謬性の理論をめぐる抵抗戦線が張られるわけであるが、今はそれには立ち入らずに、「恭しい沈黙」が何よりも一つの服従の形として提示されていたことを確認するに留める。

この「沈黙」は、反ジャンセニストから疑いの目で見られた。17 世紀以来のその疑念の結晶とも言うべき文書が、『トレヴー』も言及している大勅書「ウィネアム・ドミニ」である。それによれば、「恭しい沈黙」を行使する者は、誤謬を捨て去るどころか隠蔽し、「教会に従うのではなく教会を騙し、ついには不服従の子らに大きな道を開いて、沈黙によって異端を助長する」。だからこそ、クレメンス 11 世は、「恭しい沈黙」が服従としては不十分であると宣言し、「口だけでなく心でも」ジャンセニウスを断罪するよう命じたのであった[24)]。このような見方が生まれたのは、アルノーの言う「恭しい沈黙」が、教会組織への敬意に基づく服従の意思表示である一方で、良心に対するあらゆる干渉の拒否を唱える態度表明でもあったからである。この側面に明確な表現を与えたのが、信仰宣誓書問題である。大勅書における事実の誤認を確信するアルノーは、署名すべき定型文書が作成されると、こう断言するに至る。

> 教皇の権威に従おうとどれだけ望んでいても、聖座に服従を証し立てるために我々ができるのは、せいぜい、恭しい沈黙でその決定を受け入れ、内的な信念によってそれに同意しないことだけである[25)]。

24）L. Mention éd., *Documents relatifs aux rapports du clergé avec la royauté de 1682 à 1705*, Paris, A. Picard et fils, 1893, p. 171–173. 仏訳は以下を参照。[L. Ellies Du Pin], *Histoire ecclésiastique du dix-septième siècle*, t. IV, Paris, A. Pralard, 1714, p. 489–491.

25）A. Arnauld, *Réflections d'un docteur de Sorbonne, sur l'avis donné par Monseigneur l'évêque d'Alet, sur le cas proposé touchant la souscription de la dernière constitution du pape Alexandre VII et du formulaire de l'assemblée*

この立場は、1664 年にパリ大司教アルドゥアン・ド・ペレフィクスが署名の要件について大幅に譲歩した教書を公表するにあたり、より明確になるであろう[26)]。いずれにせよ、「恭しい沈黙」とは、本音を押し殺した同意、すなわち規律上の服従なのである。それは、歴史家ジャン・ドリュモーがジャンセニスムの特徴の一つと見なした「反乱の心性 mentalité d'opposition」や、オルシバルが 17 世紀のポール＝ロワイヤルに通底すると考えた「抵抗の精神 esprit de résistance」を形作る一要素である[27)]。王権と教会は、こうした新しい形の服従を理解することはなかったように思われる。

「恭しい沈黙」が、純然たる服従と抵抗の中間に位置する両義的な態度であることは、もはや明らかである。それは、ある人にとっては規律正しい服従であり、ある人にとっては本心を計り知れない不気味な不服従であった。こうした意味のずれによって、ジャンセニウス擁護派は、服従を誓えば誓うほど抵抗勢力としての輪郭を露わにしてしまう状況に陥った。彼らは、ジャンセニスムの形成に、知らずに力を貸していたのである。

おわりに

以上のような考察を積み重ねたとしても、ジャンセニスムの内実について、何かが明らかになるわけではない。しかし、ここまでの話を踏まえれば、ジャンセニスムは、その外縁を確定しようとした者たちと、それを引き受けるのを拒否した者たちとの相互作用を通して作り上げられた概念の枠組みとして理解することができるだろう。政治の次元で事件を主導した反ジャンセニストが、その形成において重要な役割を果たしたことは言うまでもないが、彼らが標的としたジャンセニストの側の要因も見過ごすことはできない。そ

---

générale du clergé de France, s. l., [1657], in *Œuvres*, t. XXI, p. 25. 傍点は引用者による。

26）A. Arnauld, *Apologie pour les religieuses de Port-Royal*, Paris, s. n., 1665, in *Œuvres*, t. XXIII, p. 453.

27）J. Delumeau et M. Cottret, *Le catholicisme entre Luther et Voltaire*, 6e éd., Paris, PUF, 1996 [1971], p. 224 ; J. Orcibal, *Saint-Cyran et le jansénisme*, Paris, Éditions du Seuil, 1961, p. 156.

の要因が「恭しい沈黙」であるにせよ、あるいは別のものであるにせよ、彼らの思想と行動は、自らが拒絶したジャンセニスムに実体を与える方向に機能していたように見える。このような見通しに立ってジャンセニスムの「生成」の歴史を辿ることは、それを語ることは可能かという問いに答え得る試みとして、今後のジャンセニスム研究の重要な課題になるように思われる。

* 本研究は、科研費（課題番号 15K16632）の助成を受けたものである。